

2017年4月3日

2017年度 新入社員入社式式辞（スピーチ用原稿）

代表取締役 石和田 雄二

1. はじめに

{歓迎の言葉： 季節の話題プラス当社入社への祝辞}

新社会人の皆さん、本日は入社、おめでとうございます。

桜は開花後、寒気の為か平年より大分遅れましたが、

この一両日で上野公園は満開です。

モクレンもコブシも、馬酔木も順天堂の前庭に咲く。

春を待兼ねた様に咲いた早春の花は、今も目に眩しい。

一方で常緑樹クスノキの衣替えに初夏の訪れを感ずる。

4月は門出の時、満開の桜と共に春の花や樹木たちが、

一斉に皆さんの門出を祝福している。

課題先進国の日本も、新たな時代に歩み出しています。

社会の大きな革新の時であり、ITサービスの新時代の

始まり、当社も体制を整え、未来に挑戦を始めます。

IT サービスは、
かつて 3K 職場と言われたこともあるが、
今は、日本という課題先進国の未来を拓く大切な産業、
社会インフラとして産業界を支える重要な役割を担う。

皆さんの成長と技術力を期待しているのは、
ひとり、

1 私企業の当社だけでなく、
日本の社会が、国が、次世代を担う若者が期待している。
少子高齢化の様々な課題を解決するのは IT サービス、
皆さんが、これから就くことになる職業です。

これから、1 年、3 年、5 年、
現実の仕事の中で IT 技術者として成長
気概を持って努力、立派な IT 技術者になって下さい。

2. 何故、IT サービスが期待されるのか？

{少子高齢化の日本を救えるのは、IT サービスだけだ}

日本は世界3位の経済大国であり、安全で豊かな成熟社会に見えるが、その将来には課題が山積している。

少子高齢化を軸に、

財政も、産業力も、社会インフラも

政治外交力さえも、急速に衰えてゆく可能性がある。

劣化しつつある国力(国民の生活水準や産業力)を支え、
更なる発展を図れるのは、IT サービスだけだ。

IT サービス産業は、

リアルビジネスと結つくことで大きな価値を生み出す。

一つは、産業での生産性の向上であり、

一つは、新たな利便性を提供するコミュニケーションメディアとして、

更には、科学技術や芸術面で価値創造への支援の役割、

最近では、深層学習とビッグデータ活用技術の進展で、

支援を超え、IT サービス自体が創造を担う。

特に、これからの日本で重要なのは労働生産性向上だ。
2010年に1億2800万だった日本の人口が2030年には
1億1600万人、約10%1200万人が減少する見通しだ。
それ以上に重要なのは、生産年齢人口、
2010年の8000万人から2030年には6700万人となり、
20%弱の1300万人が減る。
生産年齢人口の全人口比では、63%から58%に落ち込む。

その影響は、現役世代の負担が増えるだけでなく、
国力そのものが弱体化することになる。

これを抑えるためには、次の3点、

- 労働生産性を向上させる。
- 労働人口を増やす。
- サービス機器の自動化、自律化を進める。

これを支えられるのは、他ならぬ先端技術のITだけだ。
現行ITサービスの進化に加え、AIの活用やロボット、IoT
やビッグデータ解析、フィンテック、等々
これからの先端技術が大きな役割を担うことになる。

3. 日本の IT サービスは、どう変わって行くのか？

{最近のニュースから、IT サービス産業の動向を読む}

結論的には、大手ベンダーは元受けの役割縮小、業界は淘汰が進み、実業重視でエンドユーザー指向が強まる。

最近のニュースから IT 関連企業の動きを読むと・・・

[1/22] 三菱 UFJ の基幹システムが AWS にシフト。

IBM 基幹ユーザーの三菱 UFJ が AWS クラウドへ。

[2/28] 富士通、IT による働き方改革を自ら実施へ。

高セキュリティ遠隔会議基盤活用、テレワーク率先垂範。

[3/19] IoT 規約共同提案、日独 IT 技術提携宣言。

先端技術の実用化協力、日独連携で成果独占狙う。

[3/23] 日中韓 AI の世界碁選手権、AI 井山に勝利。

α 碁登場から 1 年、ブーム超え AI の進歩と普及急。

[3/27] G5 媒介にトヨタ、NTT と自動走行で協業。

高速大容量通信で周辺車両との自走安全性確保。

[3/30] 日米欧豪 6 行ブロックチェーン活用し送金で連合。

ビットコインとブロックチェーン使う海外送金効率化実用化へ。

世の中の動きから見える IT サービスの動向と特徴は、

- 1) 所有から利用、IT サービスも Sharing Business 化
=> クラウドと Open Source 普及、顧客主導へ。
- 2) IoT でモノとモノが繋がる時代、情報爆発の時代
=> 携帯端末を超え、人と人、人と車、車と車。
- 3) 専門家の経験より、データに学び知見を得る時代
=> 深層学習登場でビッグデータ解析手法確立
- 4) リアルビジネスと先端 IT 技術、特に AI との結合
=> 大手 IT ベンダーの中抜き、専門技術要請
- 5) 高度専門家の仕事を IT サービスが代替する時代
=> AI で自動化ネック専門家代替、自動一通化
- 6) P2P の新分散ネットで権威的中央集中崩壊の時代
=> ブロックチェーンは銀行支援より銀行不要化作用

～ 今起こりつつある IT サービスの変化は、

従来技術を陳腐化し、旧来の業界構造を破壊する。

IoT、ビッグデータ、AI、ロボット、G5 など新しい

IT 技術の実用化が本格化し、業界も幕末維新を迎える。

4. これからの経営環境は、どう変わるのか？

{ITの進展と同期、世界は歴史的な変革期の渦中にある。}

日本も世界も変革期にあり、新時代が始まる時だ。

ITサービスで社会は大きく変わり、景気は上向く。

独「インダストリー4.0」は第4次産業革命に通じる道だ。

第一次産業革命：イノベーション ～ 蒸気機関

第二次産業革命：イノベーション ～ 電気・化学

第三次産業革命：イノベーション ～ コンピュータ

第四次産業革命：イノベーション ～ IoT、AI、他

IoTやAIが実用段階の入口を迎えているのが今。

4, 5年前に、米国のサマーズ元財務長官は、世界的な景気停滞に触れて、リーマン危機の後遺症でもあるが、本質はイノベーション不足による長期循環停滞とした。

確かにインターネットやクラウドも含め、コンピュータ時代が終わり、まだ次の時代は始まっていないとの認識。

しかし今、先端技術がリアルビジネスを変え始めている。

海外の政治リスクはあるが、経済は順調に推移する。

景気循環には、4つの波がある。

- ① キチンの波（約3年周期）：在庫循環
- ② ジュグラーの波（約10年周期）：設備投資
- ③ クスネツの波（約25年周期）：社会インフラ
- ④ コンドラチエフの波（約50年周期）：イノベーション

今の日本の状況は、東京五輪を控えていることもあるが、都心の高層ビルの建替えが盛んに行われ、リニアが走り、圏央道を軸に交通網の見直しが始まっている。

社会インフラの更新期だ。

停滞気味の設備投資も、原油価格の上昇で動き始めた。

これに、IoT、ビッグデータ、AIを軸にした技術革新、イノベーションが本格的に動き出してきた。

この傾向は、日本だけでなく、世界的に共通な現象だ。

上記の②、③、④が同期を取る様に動き出して来たのだ。

海外の政治リスクはあるが、最低限、日本においては、ITサービスが支える安定経済成長が始まる時期にある。

5. 当社の立ち位置はどうか？ 成長できるのか？

{待望の機会、創業の原点に立戻り、志高く次代を拓く}

IVIS は、来年の 11 月、創業 30 周年を迎える。

平成の夜明け前に生まれ、今平成が区切りを迎える。

新年度を迎え当社は新たな成長に向けスタートを切る。

IVIS という社名は、Intelligent Vision & Image Systems

の略字、会社立上げの時、眠れぬ夜に一晩で考えたもの、

それまで、私が経験して来た CAD/CAM/CAE・CG、

言語処理系、述語論理系の AI の開発を通じ、

思い描いた AI やロボットへの夢を反映した名前だ。

考えてみれば、失われた 20 年の停滞の中では、

受託開発中心に会社作りに夜も昼もなく働いてきたが、

今、ここに来て漸く、

IVIS 創業の夢にチャレンジ出来る環境が生まれてきた。

時代の流れに乗り、社員と共に高い目標に挑戦したい。

企業としても、新たな業界の先頭集団の一角を目指す。

来年 30 周年を迎える当社は、決して古い会社ではない。
今年も、皆さんを迎えて社員 480 名、平均年齢 33 歳、
過去の実績もあるが、若く、元気で活力のある会社だ。

本社には、エンジニアリング部門、社会インフラ部門、
ビジネス部門の 3 部門、名古屋のトヨタサービス部門と
中部関西地域サービス部門の 5 つのサービス部門と
ARD の略称持つ、応用技術開発部がある。Advanced
Research &Development、先端技術開発を担当する
主な顧客は、トヨタ、NTT データ、ユニシス、富士通、IHI、
住友鉱山、・・・、それに国立研究所系の/NII/NICT/JAXA/
防衛省/名大/その他、
先端技術とエンドユーザー比率を徐々に高めている。

経営的には創業 29 期連続の黒字、今年も減収増益だが、
来年からは再び二桁成長に復帰する。

3 年計画で技術者 500 人、売上 50 億円、研究開発投資 5
億円を実現、555 で業界のリーディング企業を目指す。

6. 当社の将来性をどう見るか？その為の課題は？

{業界動向の主流は研究か運用か、当社は研究に重心}

ポイントは、先端技術シフトとエンドユーザー指向、
ITサービスの新たな流れに乗って当社の未来を拓く。

ここで業界動向を踏まえ、当社の方向性を示しておく。

- 1) エンドユーザー&リアルビジネス指向を強める。
- 2) 先端技術分野は、実用成果と応用力を重視する。
- 3) AI 中心に技術のライセンス化と人材育成を図る。
- 4) サービスは通信を軸に製造、金融、医療に注力。
- 5) 技術は顧客上流と先端に絞り、差別化を推進する。
- 6) 競合他社と協業連携深め、当社の不足能力を補う。

これにより、

基盤整備 3 カ年計画の 555 の目標を達成、

この期間で 20 年以降の成長に向けた経営基盤を構築、

同時に、顧客サービスの高度化と独自性を明確化する。

これから IT サービスは、下請けでは成立たなくなる。
大手もエンドユーザー及びリアルビジネス指向を強め、
元受的役割が薄れてゆく筈、当社が成長を維持するには、
人材育成と共に専門性と再生産可能な商品化が必要だ。
大手 IT サービスや顧客 IT 部門、専門ベンチャーとの競
合が厳しくなることを考慮すると、主体性と収益性をも
って持続的に安定成長することは、簡単ではない。
次の様な課題に、段階的に対応して行く積りだ。

- 独自 IT 機器の商品化： 制御大手との連携を模索
- 企業規模相応の営業力： 提案力ある若手自主育成
- 現場管理層の育成強化： 大手ベンダーからの補強
- 経営基盤強化と安定化： 利益重視と財務基盤整備
- 経営の継承と人材育成： スタッフ組織と候補選別
- 組織力強化と人材採用： 管理本部強化と役割分担

目標は高いが、我々の IT サービス産業が課題先進国の
日本の将来を拓くことを確信、当社も一端を担うべく、
この 3 年間で確かな成長基盤を作ることに全力を尽す。

7. 皆さんに何を期待するか？

{若く無名の人材が時代を拓く、志高く、粘り強く頑張れ}

基盤整備が終わる 20 年以降には、業界は大変革期に入る。

当社は今、競争条件が整いつつあり、市場では比較優位、

このチャンスを生かし、企業として本格的浮上を目指す。

新卒社員には、この 3 年間に、当社の場合を最大限活用、

専門性と同時にリーダーとしての資質を磨いてほしい。

当社の比較優位の競争条件とは・・・

○ 技術革新期では、既存の体制を支えてきた大手よりも、成長期の勢いのある、若い中堅中小の方が有利だ。

○ 人材不足の中で、大手 IT ベンダーも、中堅中小も、優秀な素材を思う様には採用できていない。

当社は、リーマン危機以降着実に優秀な若手を採用、

同業が 40 歳を超える中、当社の平均年齢は 33 歳だ。

○ 技術系社員は、全体で 400 人強、この規模も重要だ。

この企業基盤と創業以来 29 期連続黒字の信用、

これが、当社のこれからの新たな挑戦を支えて行く。

- 先端技術に対し、顧客の質とバランスも悪くない。
当社と世界のトヨタ、通信キャリア NTT データとの関係は、長い間の信頼関係で繋がれている。
その他、防衛省や JAXA、NII や NICT、名大など、国立研究機関や大学との協業、連携の場も出来ている。
当社の顧客は業務面だけでなく、先端技術に関する学びと協業の場としても、同業他社を凌駕している。
教師として実践の場として、得難い存在となる筈だ。

需給両面で IT サービスは日本を支える基幹産業となる。
当社は今、
漸く IT サービス企業としての条件が整った段階だが、
3 年間、エンジンとなる先端技術を軸に成長基盤を固め、
その基盤の上に立って、業界の先頭集団入りを狙いたい。
2020 年以後は、先輩と共に皆さんが当社の中核となる。
各分野で SA や PL として活躍して貰うことになるが、
この 3 年間はその準備期間、技術者として現場に学び、
指導的資質を磨き、時来たれば果敢に挑戦して貰う筈だ。

8. 新入社員へのアドバイス

{技術者の成長への秘訣は、技術よりも仕事に取り組む姿勢}

職業としてのSE（IT サービス技術者）にとって、
日常的に心がけることと、会社組織での社会人＋職業人
として覚えておいた方がよい経験則を、以下に述べる。

□ SEとしての自分を成長させる心がけ

○ 目標を持ち、時々、振り返る。

仕事の目標と共に、

自分の1年後、3年後、10年後の目標を持つ。

目標が現状を立位置と努力課題を教えてくれる。

○ 疑問を持ち、自分で考え、知識の体系化に努める。

仕事の現場は最高の教師、

先輩に学び、現場問題を解く訓練を重ねると共に、

専門を定義、書籍に学び資格取得に挑戦する。

○ コミュニケーション能力を磨く。

仕事の正確な理解と関係者との摺合わせが基本、

不明点や問題を議論、考えを他社に伝える。

会話より論点整理の習慣が大切。

会社では会社組織（チーム）の一員として仕事をする。
仕事をする上での基本的なルール、一般則がある。

□ 良く使われる4つの経験則とその内容、

新人には解らなくとも役に立つ言葉、3年5年・・・、
これからの実践の現場の中で徐々に活用して下さい。

○ 『ホウ・レン・ソウ』 上司へ心がける。

与えられた仕事に対し、報告・連絡・相談

○ 『5W3H』 仕事の内容を確認する。

仕事の定義、5W+How、How many、How much

○ 『PDCA サイクル』 回して仕事の質を高める。

P（計画）、D（実行）、C（評価）、A（改善）

○ 『ムリ・ムラ・ムダ』 旨くない原因究明と除去

合理的な計画、集中出来る環境、効率化の工夫。

新人は、先輩や上司に何でも教えて貰える特権がある。

不明なことは、問題を整理の上、先輩に遠慮なく聴き、
納得するまで自らも考えて知識を自分のものとする。

その上で甘えず逃げず、新たな未知へ踏出すことだ。

9. おわりに

{職業人、社会人として今日からが勉強のスタートだ。}

勉強は、大学を卒業したら終わりではない。

IT サービスのプロとして、今からが勉強のスタートだ。

IT が急速に進歩、AI が専門家に取って代わる時代の今、

IT サービスを担う技術者として、学びに終わりはない。

旧来の経験的な知識は、急速に役に立たなくなり、

学んだばかりの表面的な新しい知識も、

厳しい現場では、本質的な問題解決の力にはならない。

我々IT サービスの技術者は、不断に学ぶ姿勢は崩さず、

知識を、実践を通じて自分の血肉とする努力が必要だ。

その上で新たな問題に立向かう勇気が人を成長させる。

最後に、異分野で活躍される職業人の言葉を紹介する。

イオンエンジンを開発、小惑星に着地、サンプルを採取

して日本に帰ってきた「はやぶさ」のグループ長、

これからの「はやぶさ2」のPM、国中教授の話です。

朝日新聞「仕事力」からの抜粋

『イオンエンジンは燃費が良く、非力な打上ロケットでも、これと組み合わせると遠く深宇宙にも出掛け、地球にも帰還可能、はやぶさはこれで行くと決めた。』

『はやぶさは着陸、採取、帰還と世界初の探査構想だ。あらゆるトラブルを想定、部品も手作りで開発した。』

『実際に各種トラブルが発生、一時行方不明にもなり、エンジンも故障したが、結果は驚異的帰還に成功した』

『成功の背景は、Black Box を超える機器の手作り。システム化やマニュアル化が進むと仕事がルーチンワークになるが、大切なのはそこから、自分ならこれをどう超えるか、アイデア着想の習慣をつけることだ。些細なことでも良い、人とは違う努力を続けること。』

日本には、様々な課題があるが、若者たちが自らを磨き、未来への挑戦を続けるならば、道は必ず開ける。

IT サービスがそれを支援する。

IVIS の仲間として、志高く一緒に頑張ってください。

以 上